

AI/IoT 特集号の発刊にあたって

取締役常務執行役員

高度情報マネジメント統括本部長 水 本 伸 子

「デジタル」の対義語は何でしょうか？ ひと昔前であれば、クォーツ時計に対するゼンマイ式機械時計や、数字に対する文字盤と針の時間表示など、アナログがデジタルの対語だったと思います。けれど、私たちが進めている IHI グループの「デジタルトランスフォーメーション (DX)」は、アナログからの脱却ではありません。インターネットで DX を調べますと、「企業がテクノロジーを利用して事業の業績や対象範囲を根底から変化させる」という説明があり、デジタルは「(デジタル)テクノロジーの利用」に置き替わっています。



IHI グループは、DX を「過去より蓄積してきたデータと、IoT/ICT の適用で新たに獲得するデータを、AI/データ分析により利活用し、ライフサイクル視点で省人化・効率最大化・運転最適化などの課題を解決することにより、IHI にしかできないお客さま価値を提供すること」と定義しています。強みの「ものづくり」と「デジタル技術」で、私たちの「ビジネスを変態させる」ことを目指しています。

確かに、紙の資料は電子化すれば検索ができ、AI で学習させることもできます。データや AI があれば何でもできそうな現代ですが、製品の稼働データを収集すること、山のような量のデータを情報として価値のあるモノにすること、さらにそれをビジネスにすること、どれをとっても簡単なことではありません。その、「面倒なこと」への挑戦が詰まっているのが今回の特集号です。技術のエッジである技術開発本部や、つなぐ機能の高度情報マネジメント統括本部の取り組み、デジタルで成果を出している事業の紹介もあります。

IHI グループの四つの事業領域には、「デジタル化しない企業は生き残れない」という危機感をもって、DX を統括する責任者 CDO (Chief Digital Officer) が任命されています。CDO たちは、DX を効率化や最適化にとどめず、事業の対象範囲をお客さまの先にある社会課題の解決に広げ、事業や領域のサイロを超えて、デジタルで「つなぐ」ことを進めています。IHI グループは、1853 年から 167 年にわたって続けてきた「ものづくり」をこれからの 100 年も続けるために、IoT/ICT そして AI をフルに活用して、製品のライフサイクルでお客さまに寄り添い、お客さまの価値を創造する DX を進めてゆきます。